

問題訂正

「国語」

訂正箇所	
23 ページ 第2問 問2 選択肢	
正	誤
⑤ 看板について悩む自分に、珍しく助言してくれた…	⑤ 看板についての悩む自分に、珍しく助言してくれた…

第1問 次の「文章Ⅰ」「文章Ⅱ」を読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。(配点 50)

【文章Ⅰ】 次の文章は、宮沢賢治の「よだかの星」を参照して「食べる」ことについて考察した文章である。なお、表記を一部改めている。

「食べる」と「生」にまつわる議論は、どうしたところで動物が主題になってしまう。ここでは動物たちが人間の言葉をはなし、また人間は動物の言葉を理解する(まさに神話的状况である)。そのとき動物も人間も、自然のなかでの生き物として、まったく対等な位相にたつてしまうことが重要なのである。動物が人間になるのではない。宮沢の記述からかいまみられるのは、そもそも逆で、人間とはもとより動物である(そうでしかありえない)ということである。そしてそれは考えてみれば、あまりに当然すぎるのである。

「よだかの星」は、その意味では、擬人化がカ(ア)ジョウになされている作品のようにおもわれる。その感情ははっきりと人間的である。よだかは、みなからいじめられ、何をしても孤立してしまう。いつも自分の醜い容姿を気にかけている。親切心で他の鳥の子供を助けても、何をするかという眼差(まなざ)しでさげすまれる。なぜ自分は生きているのかとおもう。ある意味では、多かれ少なかれ普通の人間の誰もが、一度は心のなかに抱いたことのある感情だ。さらには、よだかにはいじめっ子の鷹(たか)がいる。鷹は、お前は鷹ではないのになぜよだかという名前を名乗るのだ、しかも夜という単語と鷹という単語を借りておかしいではないか、名前を変えろと迫る。よだかはあまりのことに、自分の存在そのものを否定されたかのように感じる。

しかしよだかは、いかに醜くとも、いかに自分の存在を低くみようととも、空を飛び移動するなかで、おおきな口をあけ、羽虫をむさぼり喰(く)ってしまう。それが喉(のど)につきささるうとも、甲虫(かぶつむし)を食べてしまう。自然に対しては、自分は支配者のような役割を演じてしまいうるのである。だがどうして自分は羽虫を「食べる」のか。なぜ自分のような存在が、劣等感をもちながらも、他の生き物を食べて生きていくのか、それがよいことかどうかかわからない。

夜だかが思ひ切つて飛ぶときは、そらがまるで二つに切れたやうに思はれます。一疋ひきの甲虫が、夜だかの咽喉のどにはひつて、ひどくもがきました。よだかはすぐそれを呑みこみましたが、その時何だかせなががぞつとしたやうに思ひました。
〔宮沢賢治全集5〕、八六頁ページ

A
ここからよだかが、つぎのように思考を展開していくことは、あまりに自明なことであるだろう。

（ああ、かぶとむしや、たくさんの羽虫が、毎晩僕に殺される。そしてそのただ一つの僕がこんどは鷹に殺される。それがこんなにつらいのだ。ああ、つらい、つらい。僕はもう虫をたべないで餓うえて死なう。いやその前にもう鷹が僕を殺すだろう。いや、その前に、僕は遠くの遠くの空の向ふに行つてしまはう。）（同書、八七頁）

当然のことながら、夏の夜の一夜限りの生命かもしれない羽虫を食べること、短い時間しかいのちを送らない甲虫を食べること、そもそも食物連鎖上のこととしてやむをえないことである。それにそもそもこの話は、もともとはよだかが自分の生のどこかに困難を抱えていて（それはわれわれすべての鏡だ）、それが次第に、他の生き物を殺して食べているという事実の問いに転化され、そのなかで自分も鷹にいずれ食べられるだろう、それならば自分は何も食べず絶食し、空の彼方かなたへ消えてしまおうというはなしにさらに転変していくものである。

よだかは大犬座の方に向かい億年兆年億兆年かかるといわれても、さらに大熊星の方に向かい頭を冷やせといわれても、なおその行為をやめることはしない。結局よだかは最後の力を振り絞り、自らが燃え尽きることにより、自己の行為を昇華するのである。

食べるという主題がここで前景にでているわけではない。むしろまずよだかにとって問題なのは、どうして自分のような惨めな存在が生きつづけなければならないのかということであった。そしてその問いの先にあるものとして、ふと無意識に口にして

いた羽虫や甲虫のことが気にかかる。そして自分の惨めさを感じつつも、無意識にそれを咀嚼そしゃくしてしまっている自分に対し「せなかぞつとした」「思ひ」を感じるのである。

よくいわれるように、このはなしは食物連鎖の議論のようにみえる。確かに表面的にはそう読めるだろう。だがよだかは、実はまだ自分が羽虫を食べることがつらいのか、自分が鷹に食べられることがつらいのか、たんに惨めな存在である自らが食べ物を殺して咀嚼することがつらいのか判然と理解しているわけではない。これはむしろ、主題としていえば、まずは食べないこと
の選択、つまりは断食につながるテーマである。そして、そうであるがゆえに、最終的な星への昇華という宮沢独特のストーリー性がひらかれる仕組みになっているようにもみえる。

ここで宮沢は、食物連鎖からの解放という(仏教理念として充分に想定される)事態だけをとりだすのではない。むしろここでみいだされるのは、心が「キズついたよだか」が、それでもなお羽虫を食べるという行為を無意識のうちになしていることに気がつき「せなかぞつとした」「思ひ」をもつという一点だけにあるようにおもわれる。それは、**B** 人間である(ひよつとしたら同時によだかでもある)われわれすべてが共有するものではないか。そしてこの思いを昇華させるためには、数億年数兆年彼方の星に、自らを変容させていくことしか解決策はないのである。

(ひがきたつや 檜垣立哉『食べることの哲学』による)

【文章Ⅱ】 次の文章は、人間に食べられた豚肉(あなた)の視点から「食べる」ことについて考察した文章である。

長い旅のすえに、あなたは、いよいよ、人間の口のなかに入る準備を整えます。箸で挟まれたあなたは、まったく抵抗できぬままに口に運ばれ、アミラーゼの入った唾液をたっぷりかけられ、舌になぶられ、硬い歯によって噛み切られ、すり潰されま
す。そのあと、歯の隙間に残ったわずかな分身に別れを告げ、食道を通って胃袋に入り、酸の海のなかでドロドロになります。

十二指腸でも胆汁すいえきと胆汁が流れ込み消化をアシストし、小腸にたどり着きます。ここでは、小腸の運動によってあなたは前後左

右にもまれながら、六メートルに及ぶチューブをくねくね旅します。そのあいだ、小腸に出される消化酵素によって、炭水化物がブドウ糖や麦芽糖に、脂肪を脂肪酸とグリセリンに分解され、それらが腸に吸収されていきます。ほとんどの栄養を吸い取られたあなたは、すっかりかたちを変えて大腸にたどり着きます。

大腸は面白いところです。大腸には消化酵素はありません。そのかわりに無数の微生物が棲んでいるのです。人間は、微生物の集合住宅でもあります。その微生物たちがあなたを(ウ)襲い、あなたのなかにある繊維を発酵させます。繊維があればあるほど、大腸の微生物は活性化するので、小さい頃から繊維をたっぷり含むニンジンやレンコンなどの根菜を食べるように言われているのです。そうして、いよいよあなたは便になって肛門(こうもん)からトイレの中へとダイビングします。こうして、下水の旅をあなたは始めるのです。

こう考えると、食べものは、人間のからだのなかで、急に変身を(エ)トげるのではなく、ゆっくり、じっくりと時間をかけ、徐々に変わっていくのであり、どこまでが食べものであり、どこからが食べものでないのかについて決めるのはとても難しいことがわかります。

答えはみなさんで考えていただくとして、二つの極端な見方を示して、終わりたいと思います。

一つ目は、人間は「食べて」などいないという見方です。食べものは、口に入るまえは、塩や人工調味料など一部の例外を除いてすべて生きものであり、その死骸であって、それが人間を通過しているにすぎない、と考えることもけつして言いすぎではありません。人間は、生命の循環の通過点にすぎないのであって、地球全体の生命活動がうまく回転するように食べさせられている、と考えていることです。

二つ目は、肛門から出て、トイレに流され、下水管を通過して、下水処理場で微生物の力を借りて分解され、海と土に戻っていき、そこからまた微生物が発生して、それを魚や虫が食べ、その栄養素を用いて植物が成長し、その植物や魚をまた動物や人間が食べる、という循環のプロセスと捉えることです。つまり、ずっと食べものである、ということ。世の中は食べもので満たされていて、食べものは、生きものの死によって、つぎの生きものに生を(オ)与えるバトンリレーである。しかも、バトンも走者

も無数に増えるバトンリレー。誰の口に入るかは別として、人間を通過しているにすぎないのです。

どちらも極端で、どちらも間違いはありません。しかも、C 二つとも似ているところさえあります。死ぬのがわかつてい
るのに生き続けるのはなぜか、という質問にもどこかで関わってきそうな気配もありますね。

(藤原辰史『食たべるとはどういうことか』による)

問 1 次の(i)・(ii)の問いに答えよ。

(i) 傍線部(ア)・(イ)・(エ)に相当する漢字を含むものを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号

は

1

}

3

。

(ア) カジヨウ

1

}

1

④ ジョウチヨウな文章
 ③ 予算のジヨウヨ金
 ② 汚れをジヨウカする
 ④ ジヨウキを逸する

(イ) キヅついた

2

}

2

④ 入会をカンシヨウする
 ③ 音楽をカンシヨウする
 ② カンシヨウ的な気分になる
 ④ 箱にカンシヨウ材を詰める

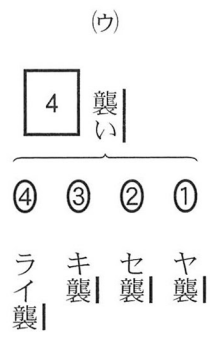
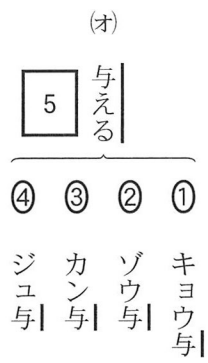
(エ) トげる

3

}

3

④ 過去の事例からルイスイする
 ③ キッスイの江戸っ子
 ② マスイをかける
 ④ 計画をカンスイする



(ii) 4 傍線部(ウ)・(オ)とは異なる意味を持つものを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

5。

問2

傍線部A「ここからよだかが、つぎのように思考を展開していく」とあるが、筆者はよだかの思考の展開をどのように捉えているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 6。

(2101—11)

- ① よだかは、生きる意味が見いだせないままに羽虫や甲虫を殺して食べていることに苦悩し、現実の世界から消えてしまおうと考えるようになる。
- ② よだかは、みなにさげすまれるばかりかついには鷹に殺されてしまう境遇を悲観し、彼方の世界へ旅立とうと考えるようになる。
- ③ よだかは、羽虫や甲虫を殺した自分が鷹に殺されるという弱肉強食の関係を嫌悪し、不条理な世界を拒絶しようと考えようになる。
- ④ よだかは、他者を犠牲にして生きるなかで自分の存在自体が疑わしいものとなり、新しい世界を目指そうと考えるようになる。
- ⑤ よだかは、鷹におびやかされながらも羽虫や甲虫を食べ続けているという矛盾を解消できず、遠くの世界で再生しようと考えようになる。

問3

傍線部B「人間である(ひよつとしたら同時によだかでもある)われわれすべてが共有するものではないか」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 7。

- ① 存在理由を喪失した自分が、動物の弱肉強食の世界でいつか犠牲になるかもしれないと気づき、自己の無力さに落胆すること。
- ② 生きること疑念を抱いていた自分が、意図せずに他者の生命を奪って生きていることに気づき、自己に対する強烈な違和感を覚えるということ。
- ③ 存在を否定されていた自分が、無意識のうちに他者の生命に依存していたことに気づき、自己を変えようと覚悟すること。
- ④ 理不尽な扱いに打ちのめされていた自分が、他者の生命を無自覚に奪っていたことに気づき、自己の罪深さに動揺すること。
- ⑤ 惨めさから逃れたいともがいていた自分が、知らないままに弱肉強食の世界を支える存在であったことに気づき、自己の身勝手さに絶望すること。

問4 傍線部C「二つとも似ているところさえあります」とあるが、どういふ点で似ているのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 8。

- ① 人間の消化過程を中心とする見方ではなく、微生物の活動と生物の排泄行為から生命の再生産を捉えている点。
- ② 人間の生命維持を中心とする見方ではなく、別の生きものへの命の受け渡しとして食べる行為を捉えている点。
- ③ 人間の食べる行為を中心とする見方ではなく、食べられる側の視点から消化と排泄の重要性を捉えている点。
- ④ 人間の生と死を中心とする見方ではなく、地球環境の保護という観点から食べることの価値を捉えている点。
- ⑤ 人間の栄養摂取を中心とする見方ではなく、多様な微生物の働きから消化のメカニズムを捉えている点。

問5

〔文章Ⅱ〕の表現に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

9

- ① 豚肉を「あなた」と見立てるとともに、食べられる生きものの側の心情を印象的に表現することで、無機的な消化過程に感情移入を促すように説明している。
- ② 豚肉を「あなた」と見立てるとともに、消化酵素と微生物とが協同して食べものを分解する様子を比喩的に表現することで、消化器官の働きを厳密に描いている。
- ③ 豚肉を「あなた」と見立てるとともに、食べものが消化器官を通過していく状況を擬態語を用いて表現することで、食べることの特異な仕組みを筋道立てて説明している。
- ④ 豚肉を「あなた」と二人称で表しながら、比喩を多用して消化過程を表現することで、生きものが他の生物の栄養になるまでの流れを軽妙に説明している。
- ⑤ 豚肉を「あなた」と二人称で表しながら、生きものが消化器官でかたちを変えて物質になるさまを誇張して表現することで、消化の複雑な過程を鮮明に描いている。

問6 Mさんは授業で「文章Ⅰ」と「文章Ⅱ」を読んで「食べる」ことについて自分の考えを整理するため、次のような【メモ】を作成した。これについて、後の(i)・(ii)の問いに答えよ。

【メモ】

<p>〈1〉 共通する要素 [どちらも「食べる」ことと生命の関係について論じている。]</p>	<p>〈2〉 「食べる」ことについての捉え方の違い</p> <p>【文章Ⅰ】 [X]</p> <p>【文章Ⅱ】 「食べる」ことは、生物を地球全体の生命活動に組み込むものである。 [] []</p>	<p>〈3〉 まとめ [Y] []</p>
-------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------	------------------------

(i) Mさんは(1)を踏まえて(2)を整理した。空欄 に入る最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① 「食べる」ことは、弱者の生命の尊さを意識させる行為である。
- ② 「食べる」ことは、自己の生命を否応なく存続させる行為である。
- ③ 「食べる」ことは、意図的に他者の生命を奪う行為である。
- ④ 「食べる」ことは、食物連鎖から生命を解放する契機となる行為である。

(ii) Mさんは(1)~(2)を踏まえて「(3)まとめ」を書いた。空欄 **Y** に入る最も適当なものを、次の①~④のうちから一つ選べ。解答番号は **11**。

- ① 他者の犠牲によってもたらされたよだかの苦悩は、生命の相互関係における多様な現象の一つに過ぎない。しかし見方を変えれば、自他の生を昇華させる行為は、地球全体の生命活動を円滑に動かすために欠かせない要素であるとも考えられる。
- ② 苦悩から解放されるためによだかが飢えて死のうとすることは、生命が本質的には食べてなどいないという指摘に通じる。しかし見方を変えれば、地球全体の生命活動を維持するためには、食べることの認識を改める必要があるとも考えられる。
- ③ 無意識によだかが羽虫や甲虫を食べてしまう行為には、地球全体の生命活動を循環させる重要な意味がある。しかし見方を変えれば、一つ一つの生命がもっている生きることへの衝動こそが、循環のプロセスを成り立たせているとも考えられる。
- ④ 他者に対してよだかが支配者となりうる食物連鎖の関係は、命のバトンリレーのなかで解消されるものである。しかし見方を変えれば、地球全体の生命活動を円滑にするためには、食べることによって生じる序列が不可欠であるとも考えられる。

第2問

次の文章は、黒井千次「庭の男」(一九九一年発表の一節である。「私」は会社勤めを終え、自宅で過ごすことが多くなっている。隣家(大野家)の庭に息子のためのプレハブ小屋が建ち、そこに立てかけられた看板に描かれた男が、「私」の自宅のダイニングキッチン(キッチン)から見える。その存在が徐々に気になりはじめた「私」は、看板のことを妻に相談するなかで、自分が案山子(かし)をどけてくれと頼んでいる雀(すずめ)のようだと感じていた。以下はそれに続く場面である。これを読んで、後の問い(問1～5)に答えよ。(配点 50)

立看板をなんとかするよう裏の家の息子に頼んでみたら、という妻の示唆を、私は大真面目で受け止めていたわけではなかった。落着いて考えてみれば、その理由を中学生かそのらの少年にどう説明すればよいのか見当もつかない。相手は看板を案山子などとは夢にも思っていないだろうから、雀の論理は通用すまい。ただあの時は、妻が私の側に立ってくれたことに救われ、気持ちが楽になっただけの話だった。いやそれ以上に、男と睨み合った時、なんだ、お前は案山子ではないか、と言ってやる僅かなゆとりが生れるほどの力にはなった。裏返されればそれまでだぞ、と窓の中から毒突くのは、一方的に見詰められるのみの関係に比べればまだましだったといえる。

しかし実際には、看板を裏返す手立てが擱めぬ限り、いくら毒突いても所詮空威張りに過ぎぬのは明らかである。そして裏の男は、私のそんな焦りを見透したかのように、前にもまして帽子の広いつばの下の眼に暗い光を溜め、こちらを凝視して止まなかった。流しの窓の前に立たずとも、あの男が見ている、との感じは肌に伝わった。暑いのを我慢して南側の子供部屋で本を読んだりしていると、すぐ隣の居間に男の視線の気配を覚えた。そうになると、本を伏せてわざわざダイニングキッチンまで出向き、あの男がいつもと同じ場所に立っているのを確かめるまで落着けなかった。

隣の家に電話をかけ、親に事情を話して看板をどうにかしてもらおう、という手も考えた。少年の頭越しのそんな手段はフェアではないだろう、との意識も働いたし、その前に親を納得させる自信がない。もしも納得せぬまま、ただこちらとのいざこざを避けるために親が看板を除去してくれたとしても、相手の内にいかなる疑惑が芽生えるかは容易に想像がつく。あの家には頭の

おかしな人間が住んでいる、そんな噂を立てられるのは恐ろしかった。

ある夕暮れ、それは妻が家に居る日だったが、日が沈んで外が少し涼しくなった頃、散歩に行くぞ、と裏の男に眼で告げて玄関を出た。家を離れて少し歩いた時、町会の掲示板のある角を曲って来る人影に気がついた。迷彩色のシャツをだらしなくジーンの上に出し、俯きかげんに道の端をのろのろと近づいて来る。まだ育ち切らぬ柔らかな骨格と、無理に背伸びした身なりとのアンバランスな組合せがおかしかった。細い首に支えられた坊主頭がふと上り、またすぐに伏せられた。隣Aの少年だ、と
思うと同時に、私はほとんど無意識のように道の反対側に移って彼の前に立っていた。

「ちよつと」

声を掛けられた少年は怯えた表情で立ち止り、それが誰かわかると小さく頷く仕種で頭だけ下げ、私を避けて通り過ぎようとした。

「庭のプレハブは君の部屋だろう」

何か曖昧な母音を洩らして彼は微かに頷いた。

「あそこに立てかけてあるのは、映画の看板かい」

細い眼が閉じられるほど細くなって、警戒の色が顔に浮かんた。

「素敵な絵だけどき、うちの台所の窓の真正面になるんだ。置いてあるだけなら、あのオジサンを横に移すか、裏返しにするか——」

そこまで言いかけると、相手は肩を聳やかす身振りで歩き出そうとした。

「待ってくれよ、頼んでいるんだから」

肩越しに振り返る相手の顔は無表情に近かった。

「もしもさ——」

追おうとした私を振り切って彼は急ぎもせず離れて行く。

吐き捨てるように彼の俯いたまま低く叫ぶ声はつきり聞えた。少年の姿が大野家の石の門に吸い込まれるまで、私はそこに立ったまま見送っていた。

ひどく後味の悪い夕刻の出来事を、私は妻に知られたくなかった。少年から見れば我が身が碌な勤め先も持たぬジジイであることに間違いはなかったろうが、一応は礼を尽して頼んでいようつもりだったのだから、中学生の餓鬼にそれを無視され、罵られたのは身に応えた。B 身体の底を殴られたような厭な痛みを少しでも和らげるために、こちらの申し入れが理不尽なものであり、相手の反応は無理もなかったのだ、と考えてみようとした。謂れもない内政干渉として彼が憤る気持ちもわからぬではなかった。しかしそれなら、彼は面を上げて私の申し入れを拒絶すればよかったのだ。所詮当方は雀の論理しか持ち合わせぬのだから、黙って引き下るしかないわけだ。その方が私もまだ救われたろう。

無視と捨台詞にも似た罵言とは、彼が息子よりも遙かに歳若い少年だけに、やはり耐え難かった。

夜が更けてクローラーをつけた寝室に妻が引込んでしまった後も、私は一人居間のソファーに坐り続けた。穏やかな鼾が寝室の戸の隙間を洩れて来るのを待つてから、大型の懐中電灯を手にしてダイニングキチンの窓に近づいた。もしや、という淡い期待を抱いて隣家の庭を窺った。手前の木々の葉越しにプレハブ小屋の影がぼくと白く漂うだけで、庭は闇に包まれている。網戸に擦りつけるようにして懐中電灯の明りをともした。光の環の中に、きっと私を睨み返す男の顔が浮かんだ。闇に縁取られたその顔は肌に血の色さえ滲ませ、昼間より一層生々しかった。

「馬鹿奴」

呟く声が身体にこもった。暗闇に立つ男を罵っているのか、夕刻の少年に怒りをぶつけているのか、自らを嘲っているのか、自分でもわからなかった。懐中電灯を手にしたまま素早く玄関を出た。土地ぎりぎりに建てた家の壁と塀の間を身体を斜めにし、すり抜ける。建築法がどうなっているのか識らないが、もう少し肥れば通ることの叶わぬ僅かな隙間だった。ランニングシャツ一枚の肩や腕にモルタルのざらつきが痛かった。

東隣との低い生垣いけがきに突き当り、檜葉ひばの間を強引に割つてそこを跨ぎ越し、我が家のブロック塀の端を迂回すると再び大野家との生垣を掻き分けて裏の庭へと踏み込んだ。乾いた小さな音がして枝が折れたようだったが、気にかかる余裕はなかった。

繁みの下の暗がりで一息つき、足許から先に懐中電灯の光をさつと這わせてすぐ消した。右手の母屋も正面のプレハブ小屋も、明りは消えて闇に沈んでいる。身を屈めたまま手探りに進み、地面に雑然と置かれている小さなベンチや傘立てや三輪車をよけて目指す小屋の横に出た。

男は見上げる高さでそこに平たく立っていた。光を当てなくとも顔の輪郭は夜空の下にぼんやり認められた。そんなただの板と、窓から見える男が同一人物とは到底信じ難かった。これではあの餓鬼に私の言うことが通じなかったとしても無理はない。

案山子にとまった雀はこんな気分がするだろうか、と動悸を抑えつつも苦笑した。

しかし濡れたように滑らかな板の表面に触れた時、指先に厭な違和感が走った。それがベニヤ板でも紙でもなく、硬質のプラスチックに似た物体だったからだ。思わず懐中電灯をつけてみずにはいられなかった。果して断面は分厚い白色で、裏側に光を差し入れるとそこには金属の補強材が縦横に渡されている。人物の描かれた表面処理がいかなるものかまでは咄嗟に掴めなかったが、それが単純に紙を貼りつけただけの代物ではないらしい、との想像はついた。雨に打たれて果無く消えるどころか、これは土に埋められても腐ることのないしたたかな男だったのだ。

それを横にずらすか、道に面した壁に向きを変えて立てかけることは出来ぬものか、と持ち上げようとした。相手は根が生えたかの如く動かない。これだけの厚みと大きさがあれば体重もかなりのものになるのだろうか。力の入れやすい手がかりを探ろうとして看板の縁を辿った指が何かに当たった。太い針金だった。看板の左端にあげた穴を通して、針金は小屋の樋としっかり結ばれている。同じような右側の針金の先は、壁に突き出たボルトの頭に巻きついていていた。その細工が左右に三つずつ、六カ所にわたって施されているのを確かめると、最早男を動かすことは諦めざるを得なかった。夕暮れの少年の細めた眼を思い出し、理由はわからぬものの、**C** あ奴はあ奴でかなりの覚悟でことに臨んでいるのだ、と認めてやりたいような気分がよぎった。

(注) モルタル——セメントと砂を混ぜ、水で練り合わせたもの。タイルなどの接合や、外壁の塗装などに用いる。

問1

傍線部A「隣の少年だ、と思うと同時に、私はほとんど無意識のように道の反対側に移って彼の前に立っていた。」とあるが、「私」をそのような行動に駆り立てた要因はどのようなことか。その説明として適当なものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は

12

13

- ① 親が看板を取り除いたとしても、少年にどんな疑惑が芽生えるか想像し恐ろしく思っていたこと。
- ② 少年を差し置いて親に連絡するような手段は、フェアではないだろうと考えていたこと。
- ③ 男と睨み合ったとき、お前は案山子ではないかと言ってやるだけの余裕が生まれていたこと。
- ④ 男の視線を感じると、男がいつもの場所に立っているのを確かめるまで安心できなかったこと。
- ⑤ 少年の発育途上の幼い骨格と、無理に背伸びした身なりとの不均衡をいぶかしく感じていたこと。
- ⑥ 少年を説得する方法を思いつけないにもかかわらず、看板をどうにかしてほしいと願っていたこと。

問2 傍線部B「身体の底を殴られたような厭な痛み」とはどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～

⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

14。

- ① 頼みごとに耳を傾けてもらえないうえに、話しかけた際の気遣いも顧みられず一方的に暴言を浴びせられ、存在が根底から否定されたように感じたことによる、解消し難い不快感。
- ② 礼を尽くして頼んだにもかかわらず少年から非難され、自尊心が損なわれたことに加え、そのことを妻にも言えないほどの汚点だと捉えたことによる、深い孤独と屈辱感。
- ③ 分別のある大人として交渉にあたれば、説得できると見込んでいた歳若い相手から拒絶され、常識だと信じていたことや経験までもが否定されたように感じたことによる、抑え難いいら立ち。
- ④ へりくだった態度で接したために、少年を増長させてしまった一連の流れを思い返し、看板についての交渉が絶望的になったと感じたことによる、胸中をえぐられるような癒し難い無念さ。
- ⑤ 看板についての悩む自分に、珍しく助言してくれた妻の言葉を真に受け、幼さの残る少年に対して一方的な干渉をしてしまった自分の態度に、理不尽さを感じたことによる強い失望と後悔。

問3

傍線部C「あ奴はあ奴でかなりの覚悟でことに臨んでいるのだ、と認めてやりたいような気分がよぎった」における「私」の心情の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

15。

- ① 夜中に隣家の庭に忍び込むには決意を必要としたため、看板を隣家の窓に向けて設置した少年も同様に決意をもって行動した可能性に思い至り、共感を覚えたことで、彼を見直したいような気持ちで心をかすめた。
- ② 隣家の迷惑を顧みることなく、看板を撤去し難いほど堅固に設置した少年の行動には、彼なりの強い思いが込められていた可能性があると感じ、陰ながら応援したいような新たな感情が心をかすめた。
- ③ 劣化しにくい素材で作られ、しっかり固定された看板を目の当たりにしたことで、少年が何らかの決意をもってそれを設置したことを認め、その心構えについては受け止めたような思いが心をかすめた。
- ④ 迷惑な看板を設置したことについて、具体的な対応を求めるつもりだったが、撤去の難しさを確認したことで、この状況を受け入れてしまったほうが気が楽になるのではないかという思いが心をかすめた。
- ⑤ 看板の素材や設置方法を直接確認し、看板に対する少年の強い思いを想像したことで、彼の気持ちを無視して一方的に苦情を申し立てようとしたことを悔やみ、多少なら歩み寄ってもよいという考えが心をかすめた。

問4 本文では、同一の人物や事物が様々な呼び表されている。それらに着目した、後の(i)・(ii)の問いに答えよ。

(i) 隣家の少年を示す表現に表れる「私」の心情の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答

番号は

16

- ① 当初はあくまで他人として「裏の家の息子」と捉えているが、実際に遭遇した少年に未熟さを認めたのちには、「息子よりも遥かに歳若い少年」と表して我が子に向けるような親しみを抱いている。
- ② 看板への対応を依頼する少年に礼を尽くそうとして「君」と声をかけたが、無礼な言葉と態度を向けられたことで感情的になり、「中学生の餓鬼」「あの餓鬼」と称して怒りを抑えられなくなっている。
- ③ 看板撤去の交渉をする相手として、少年とのやりとりの最中では「君」と呼んで尊重する様子を見せる一方で、少年の外見や言動に対して内心では「中学生の餓鬼」「あの餓鬼」と侮っている。
- ④ 交渉をうまく進めるために「君」と声をかけたが、直接の接触によって我が身の老いを強く意識させられたことで、「中学生の餓鬼」「息子よりも遥かに歳若い少年」と称して彼の若さをうらやんでいる。
- ⑤ 当初は親の方を意識して「裏の家の息子」と表していたが、実際に遭遇したのちには少年を強く意識し、「中学生の餓鬼」「息子よりも遥かに歳若い少年」と彼の年頃を外見から判断しようとしている。

(ii) 看板の絵に対する表現から読み取れる、「私」の様子や心情の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

17。

① 「私」は看板を「裏の男」と人間のようを意識しているが、少年の前では「映画の看板」と呼び、自分の意識が露呈しないように工夫する。しかし少年が警戒すると、「素敵な絵」とたたえて配慮を示した直後に「あのオジサン」と無遠慮に呼んでおり、余裕をなくして表現の一貫性を失った様子が読み取れる。

② 「私」は看板について「あの男」「案山子」と比喩的に語っているが、少年の前では「素敵な絵」と大げさにたたえており、さらに、少年が憧れているらしい映画俳優への敬意を全面的に示すように「あのオジサン」と呼んでいる。少年との交渉をうまく運ぼうとして、プライドを捨てて卑屈に振るまう様子が読み取れる。

③ 「私」は妻の前では看板を「案山子」と呼び、単なる物として軽視しているが、少年の前では「素敵な絵」とたたえ、さらに「あのオジサン」と親しみを込めて呼んでいる。しかし、少年から拒絶の態度を示されると、「看板の絵」「横に移す」「裏返しにする」と物扱いしており、態度を都合よく変えている様子が読み取れる。

④ 「私」は看板を「裏の男」「あの男」と人間に見立てているが、少年の前でとつさに「映画の看板」「素敵な絵」と表してしまつたため、親しみを込めながら「あのオジサン」と呼び直している。突然訪れた少年との直接交渉の機会に動揺し、看板の絵を表す言葉を見失い慌てふためいている様子が読み取れる。

問5 Nさんは、二重傍線部「案山子にとまった雀はこんな気分がするだろうか、と動悸を抑えつつも苦笑した。」について理解を深めようとした。まず、国語辞典で「案山子」を調べたところ季語であることがわかった。そこでさらに、歳時記(季語を分類して解説や例句をつけた書物)から「案山子」と「雀」が詠まれた俳句を探し、これらの内容を「フート」に整理した。このことについて、後の(i)・(ii)の問いに答えよ。

「フート」

●国語辞典にある「案山子」の意味

ア竹や藁わらなどで人の形を造り、田畑に立てて、鳥獣が寄るのをおどし防ぐもの。とりおどし。

イ見かけばかりもっともらしくて、役に立たない人。

季語・秋。

●歳時記に掲載されている

案山子と雀の俳句

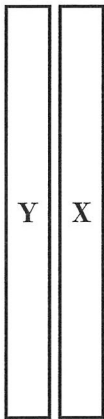
- ①「案山子立つれば群雀空にしづまらず」(飯田蛇笏だごう)
- ②「稲雀追ふ力なき案山子かな」(高浜年尾)
- ③「某それがしは案山子にて候まごころ雀殿」(夏目漱石)

●解釈のメモ

- ①遠くにいる案山子に脅かされて雀が群れ騒ぐ風景。
- ②雀を追い払えない案山子の様子。
- ③案山子が雀に対して虚勢を張っているように見える様子。

●「案山子」と「雀」の関係に注目し、看板に対する「私」の認識を捉えるための観点。

- ・看板を家の窓から見ていた時の「私」↓
- ・看板に近づいた時の「私」↓



(i) Nさんは、「私」が看板を家の窓から見ていた時と近づいた時にわけたうえで、国語辞典や歳時記の内容と関連づけながら「フート」の傍線部について考えようとした。空欄 と に入る内容の組合せとして最も適当なものを、後の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 。

(ア) — 歳時記の句②では案山子の存在に雀がざわめいている様子であり、国語辞典の説明②にある「おどし防ぐ」存在となっていることに注目する。

(イ) — 歳時記の句③では案山子が虚勢を張っているように見え、国語辞典の説明①にある「見かけばかりもつともらし」い存在となっていることに注目する。

(ウ) — 歳時記の句④では案山子が実際には雀を追い払うことができず、国語辞典の説明①にある「見かけばかりもつともらし」い存在となっていることに注目する。

(エ) — 歳時記の句⑤では案山子が雀に対して自ら名乗ってみせるだけで、国語辞典の説明②にある「おどし防ぐ」存在となっていることに注目する。

- | | | |
|---|---------|---------|
| ④ | X (イ) | Y (エ) |
| ③ | X (イ) | Y (ウ) |
| ② | X (ア) | Y (エ) |
| ① | X (ア) | Y (ウ) |

(ii) 「フート」を踏まえて「私」の看板に対する認識の変化や心情について説明したものととして、最も適当なものを、次の

①、⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

19。

① はじめ「私」は、③「某は案山子にて候雀殿」の虚勢を張る「案山子」のような看板に近づけず、家のなかから眺めているだけの状態であった。しかし、そばまで近づいたことで、看板は①「見かけばかりもつともらし」いものであることに気づき、これまで「ただの板」にこだわり続けていたことに対して大人げなさを感じている。

② はじめ「私」は、⑥「稲雀追ふ力なき案山子かな」の「案山子」のように看板は自分に危害を加えるようなものではないと理解していた。しかし、意を決して裏の庭に忍び込んだことで、看板の⑦「おどし防ぐもの」としての効果を実感し、雀の立場として「ただの板」に苦しんでいる自分に気恥ずかしさを感じている。

③ はじめ「私」は、自分を監視している存在として看板を捉え、⑦「おどし防ぐもの」と対面するような落ち着かない状態であった。しかし、おそろおそろ近づいてみたことで、③「某は案山子にて候雀殿」のように看板の正体を明確に認識し、「ただの板」に対する怖さを克服しえた自分に自信をもつことができたと感じている。

④ はじめ「私」は、⑦「とりおどし」のような脅すものとして看板をとらえ、その存在の不気味さを感じている状態であった。しかし、暗闇に紛れて近づいたことにより、実際には⑥「稲雀追ふ力なき案山子かな」のような存在であることを発見し、「ただの板」である看板に心を乱されていた自分に哀れみを感じている。

⑤ はじめ「私」は、常に自分を見つめる看板に対して④「群雀空にしづまらず」の「雀」のような心穏やかでない状態であった。しかし、そばに近づいてみたことにより、看板は①「見かけばかりもつともらし」いものであって恐れるに足りないのとわかり、「ただの板」に対して悩んできた自分に滑稽さを感じている。

第3問

次の【文章Ⅰ】は、鎌倉時代の歴史を描いた『増鏡』の一節、【文章Ⅱ】は、後深草院ごふかぐさに親しく仕える二条という女性が書いた『とはずがたり』の一節である。どちらの文章も、後深草院ごふかぐさ（本文では「院」）が異母妹である前齋宮さいてう（本文では「齋宮」）に恋慕する場面を描いたものであり、【文章Ⅰ】の内容は、【文章Ⅱ】の6行目以降を踏まえて書かれている。【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】を読んで、後の問い（問1～4）に答えよ。なお、設問の都合で【文章Ⅱ】の本文の上に行数を付してある。（配点 50）

【文章Ⅰ】

院も我が御方にかへりて、うちやすませ給へれど、まどろまれ給はず。ありつる御面影、心にかかりておぼえ給ふぞいとわりなき。「さしはへて聞こえむも、人聞きよろしかるまじ。いかがはせむ」と思し乱る。御はらからといへど、年月よそにて生ひたち給へれば、うとうとしくならひ給へるままに、A つつましき御思ひも薄くやありけむ、なほひたぶるにいぶせてやみなむは、あかず口惜しと思す。けしからぬ御本性なりや。

（注2） なにがしの大納言むすめの女、御身近く召し使ふ人、かの齋宮（注3）にも、さるべきゆかりありて睦ましく参りなるるを召し寄せて、

「なれなれしきまでは思ひ寄らず。ただ少しけ近き程にて、思ふ心の片端を聞こえむ。かく折よき事もいと難かるべし」と B せちにまめだちてのたまへば、いかがたばかりけむ、夢うつつともなく近づき聞こえ給へれば、いと心憂しと思せど、あえかに消えまどひなどはし給はず。

【文章Ⅱ】

1 齋宮は二十に余り給ふ。（イ）ねびととのひたる御さま、神もなごりを慕ひ給ひけるもことわりに、花といはば、桜にたとへても、よそ目はいかがとあやまたれ、霞の袖を重ぬるひまもいかにせましと思ひぬべき御ありさまなれば、ましてくまなき御心の内は、いつしかいかなる御物思ひの種にかと、よそも御心苦しくぞおぼえさせ給ひし。

（注4） 御物語ありて、（注7） 神路かみちの山の御物語など、絶え絶え聞こえ給ひて、

5

「今宵はいたう更け侍りぬ。のどかに、明日は嵐(注8)の山の禿かぶろなる梢しずえどもも御覧じて、御帰りあれ」
など申させ給ひて、我が御方へ入らせ給ひて、いつしか、

「いかがすべき、いかがすべき」

と仰せあり。思ひつることよと、をかしくてあれば、

「幼(注9)くより参りしるしに、このこと申しかなへたらむ、まめやかに心ざしありと思はむ」

10

など仰せありて、やがて御使つかひに参る。ただ、おほかたなるやうに、「御対面うれしく。御旅寝すさまじくや」などにて、忍びつつ文あり。氷襲(注10)の薄様うすやうにや、

「知られじな今しも見つる面影のやがて心にかかりけりとは」

更けぬれば、御前なる人もみな寄り臥ふしたる。御主ぬしも小几帳(注11)引き寄せて、御殿籠りたるなりけり。近く参りて、事のやう奏

すれば、御顔うち赤めて、いと物ものたまはず、文も見るとしもなくて、うち置き給ひぬ。

15

「何とか申すべき」

と申せば、

「思ひ寄らぬ御言の葉は、何と申すべき方もなくて」

とばかりにて、また寝給ひぬるも心やましければ、帰り参りて、このよしを申す。

「ただ、寝たまふらむ所へ導け、導け」

20

と責めさせ給ふもむつかしければ、御供に参らむことはやすくこそ、しるべして参る。甘(注12)の御衣かみなどはことごとしければ、御大(注13)口ばかりにて、忍びつつ入らせ給ふ。

まづ先に参りて、御障子をやをら開けたれば、ありつるままにて御殿籠りたる。御前なる人も寝入りぬるにや、音する人もな

く、小(注14)さらかに這はひ入らせ給ひぬる後、いかなる御事どもかありけむ。

(注) 1 さしはへて——わざわざ。

2 なにがしの大納言の女——二条を指す。二条は「文章Ⅱ」の作者である。

3 齋宮——伊勢神宮に奉仕する未婚の皇族女性。天皇の即位ごとに選ばれる。

4 神もなごりを慕ひ給ひける——齋宮を退きながらも、帰京せずにはばらく伊勢にとどまっていたことを指す。

5 霞の袖を重ぬる——顔を袖で隠すことを指す。美しい桜の花を霞が隠す様子にたとえる。

6 くまなき御心——院の好色な心のこと。

7 神路の山の御物語——伊勢神宮に奉仕していた頃の思い出話を指す。

8 嵐の山の禿なる梢ども——嵐山あらしやまの落葉した木々の梢。

9 幼くより参りし——二条が幼いときから院の側近くにいたことを指す。

10 水襲の薄様——「水襲」は表裏の配色で、表も裏も白。「薄様」は紙の種類。

11 小几帳——小さい几帳のこと。

12 甘の御衣——上皇の平服として着用する直衣のうし。

13 大口——束帯のときに表袴の下にはく裾口の広い下袴。

14 小さらかに——体を縮めて小さくして。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

20
22

(ア) まどろまれ給はず

20

- ① 酔いが回らずにいらつしやる
- ② お眠りになることができない
- ③ ぼんやりなさっている場合ではない
- ④ お心が安まらずにいらつしやる
- ⑤ 一息つこうともなさらない

(イ) ねびととのひたる

21

- ① 将来が楽しみな
- ② 成熟した
- ③ 着飾った
- ④ 場に調和した
- ⑤ 年相応の

(ウ) おほかたなるやうに

22

- ① 特別な感じで
- ② 落ち着き払って
- ③ ありふれた挨拶で
- ④ 親切心を装って
- ⑤ 大人らしい態度で

問2 傍線部A「つつましき御思ひも薄くやありけむ、なほひたぶるにいぶせてやみなむは、あかず口惜しと思す」の語句や表

現に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 23。

- ① 「つつましき御思ひ」は、兄である院と久しぶりに対面して、気恥ずかしく思っている齋宮の気持ちを表している。
- ② 「ありけむ」の「けむ」は過去推量の意味で、対面したときの齋宮の心中を院が想像していることを表している。
- ③ 「いぶせて」は、院が齋宮への思いをとげることができずに、悶々もんもんとした気持ちを表している。
- ④ 「やみなむ」の「む」は意志の意味で、院が言い寄ってくるのをかわそうという齋宮の気持ちを表している。
- ⑤ 「あかず口惜し」は、不満で残念だという意味で、院が齋宮の態度を物足りなく思っていることを表している。

問3 傍線部B「せちにまめだちてのたまへば」とあるが、このときの院の言動についての説明として最も適当なものを、次の

①、⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 24。

- ① 二条と齋宮を親しくさせてでも、齋宮を手に入れようと企たくらんでいるところに、院の必死さが表れている。
- ② 恋心を手紙で伝えることをはばかる言葉に、齋宮の身分と立場を気遣う院の思慮深さが表れている。
- ③ 自分の気持ちを齋宮に伝えてほしただけだという言葉に、齋宮に対する院の誠実さが表れている。
- ④ この機会を逃してはなるまいと、一気に事を進めようとしているところに、院の性急さが表れている。
- ⑤ 自分と親密な関係になることが齋宮の利益にもなるのだと力説するところに、院の傲慢さが表れている。

問4 次に示すのは、授業で「文章Ⅰ」「文章Ⅱ」を読んだ後の、話し合いの様子である。これを読み、後の(i)～(iii)の問いに答えよ。

教師 いま二つの文章を読みました。【文章Ⅰ】の内容は、【文章Ⅱ】の6行目以降に該当していました。【文章Ⅰ】は【文章Ⅱ】を資料にして書かれています。かなり違う点もあって、それぞれに特徴がありますね。どのような違いがあるか、みんなで考えてみましょう。

生徒A 【文章Ⅱ】のほうが、【文章Ⅰ】より臨場感がある印象かなあ。

生徒B 確かに、院の様子なんかそうかも。【文章Ⅱ】では **X**。

生徒C ほかに、二条のコメントが多いところも特徴的だね。【文章Ⅱ】の **Y**。普段から院の側に仕えている人の目で見たことが書かれているっていう感じがあるよ。

生徒B そう言われると、【文章Ⅰ】では【文章Ⅱ】の面白いところが全部消されてしまっている気がする。すっきりしてまとまっているけど物足りない。

教師 確かにそう見えるかもしれませんが、【文章Ⅰ】がどのようにして書かれたものなのかも考える必要がありますね。【文章Ⅰ】は過去の人物や出来事などを後の時代の人が書いたものではないということに注意しましょう。【文章Ⅱ】のように当事者の視点から書いたものではないということに注意しましょう。

生徒B そうか、書き手の意識の違いによってそれぞれの文章に違いが生じているわけだ。

生徒A そうすると、【文章Ⅰ】で **Z**、とまとめられるかな。

生徒C なるほど、あえてそういうふう書き換えたのか。

教師 こうして丁寧に読み比べると、面白い発見につながりますね。

(i) 空欄 **X** に入る最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は **25**。

- ① いてもたってもいられない院の様子が、発言中で同じ言葉を繰り返しているあたりからじかに伝わってくる
- ② 齋宮に対する恋心と葛藤が院の中で次第に深まっていく様子が、二条との会話からありありと伝わってくる
- ③ 齋宮に執着する院の心の内が、齋宮の気持ちを繰り返して思いやっているとところからはつきりと伝わってくる
- ④ 齋宮から期待通りの返事をもたらした院の心躍る様子が、院の具体的な服装描写から生き生きと伝わってくる

(ii) 空欄 **Y** に入る最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は **26**。

- ① 3行目「いつしかいかなる御物思ひの種にか」では、院の性格を知り尽くしている二条が、齋宮の容姿を見た院に、早くも好色の虫が起こり始めたであろうことを感づいている
- ② 8行目「思ひつることよと、をかしくてあれば」では、好色な院があの手この手で齋宮を口説こうとしているのに、世間離れた齋宮には全く通じていないことを面白がっている
- ③ 18行目「寝給ひぬるも心やましければ」では、院が強引な行動に出かねないことに対する注意を促すため、床に就いていた齋宮を起こしてしまったことに恐縮している
- ④ 20行目「責めさせ給ふもむつかしければ」では、逢瀬わうせの手引きをすることに慣れてはるはずの二条でさえ、齋宮を院のもとに導く手立てが見つからずに困惑している

(iii)

空欄

Z

に入る最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

27

。

- ① 院の齋宮への情熱的な様子を描きつつも、権威主義的で高圧的な一面を削っているのは、院を理想的な人物として印象づけて、朝廷の権威を保つように配慮しているからだろう
- ② 院と齋宮と二条の三者の関係性を明らかにすることで、複雑に絡み合った三人の恋心を整理しているのは、歴史的事実を知る人がわかりやすく描写しようとしているからだろう
- ③ 院が齋宮に送った、いつかは私になびくことになるという歌を省略したのは、神に仕えた相手との密通という事件性を弱めて、事実を抑制的に記述しようとしているからだろう
- ④ 院の発言を簡略化したり、二条の心情を省略したりする一方で、齋宮の心情に触れているのは、当事者全員を俯瞰する立場から出来事の経緯を叙述しようとしているからだろう

第4問

清の学者・政治家阮元は、都にいたとき屋敷を借りて住んでいた。その屋敷には小さいながらも花木の生い茂る庭園があり、門外の喧噪から隔てられた別天地となっていた。以下は、阮元がこの庭園での出来事について、嘉慶十八年（一八一三）に詠じた【詩】とその【序文】である。これを読んで、後の問い（問1〜7）に答えよ。なお、設問の都合で返り点・送り仮名・本文を省いたところがある。（配点 50）

【序文】

余旧蔵董思翁自書詩扇有「名園蝶夢」之句。辛未秋、有

異蝶来園中。識者知為太常仙蝶呼之落扇。繼而復見之。

於瓜爾佳園中。客有呼之入匣奉歸。余園者及至園啓

之。則空匣也。壬申春、蝶復見於余園台上。画者祝曰、苟近

我、我当囚之。蝶落其袖、審視良久、得其形色、乃從容鼓翅

而去。園故無名也。於是始以思翁詩及蝶意名之。秋半、余

奉使出都、是園又属他人。回憶芳叢、真如夢矣。

〔詩〕

春城(注7)花事小園多ク幾度看花幾度X

花ハ為レ我ガ開留我住トビメ人随春去奈春何

思翁夢好遺書扇ハ仙蝶II凶成染袖羅

他日誰家還種竹(注8)坐輿可許子猷過

(注) 1 董思翁——明代の文人・董其昌(二五五五—一六三六)のこと。

2 辛未——清・嘉慶十六年(二八一二)。

3 瓜爾佳——滿州族名家の姓。

4 空匣——空の箱。

5 壬申——清・嘉慶十七年(二八一三)。

6 従容——ゆつたりと。

7 花事——春に花をめであり、見て歩いたりすること。

8 坐輿可許子猷過——子猷は東晋・王徽之の字。竹好きの子猷は通りかかった家に良い竹があるのを見つけ、感嘆して朗詠し、輿に乗ったまま帰ろうとした。その家の主人は王子猷が立ち寄るのを待っていたので、引き留めて歓待し、意気投合したという故事を踏まえる。

(阮元『聖經室集』による)

問1 波線部「復」・「イ」審・「ウ」得のここでの意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一

つずつ選べ。解答番号は ～ 。

- (ア) 「復」
- | | | | | | |
|---------------------------------|----|------|-----|----|----|
| <input type="text" value="28"/> | ⑤ | ④ | ③ | ② | ① |
| | まだ | ふたたび | じっと | ふと | なお |

- (イ) 「審」
- | | | | | | |
|---------------------------------|-----|-----|-----|-----|-----|
| <input type="text" value="29"/> | ⑤ | ④ | ③ | ② | ① |
| | 静かに | 謹んで | 急いで | 詳しく | 正しく |

- (ウ) 「得」
- | | | | | | |
|---------------------------------|------|------|------|------|------|
| <input type="text" value="30"/> | ⑤ | ④ | ③ | ② | ① |
| | 捕獲する | 把握する | 映しだす | 手にする | 気がつく |

問2 傍線部A「客有呼之入匣奉帰余園者」について、返り点の付け方と書き下し文との組合せとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 31。

- | | | |
|---|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------|
| ① | 客有 _レ 呼 _レ 之入 _レ 匣奉 _レ 帰 _レ 余園 _一 者 | 客に之を呼び匣 <small>はこ</small> に奉じ入ること有りて余の園に帰る者あり |
| ② | 客有 _レ 呼 _レ 之入 _レ 匣奉 _レ 帰 _レ 余園 _一 者 | 客に之を呼び匣に入れ奉じて帰さんとする余の園の者有り |
| ③ | 客有 _下 呼 _レ 之入 _レ 匣奉 _レ 帰 _レ 余園 _一 者 _上 | 客に之を匣に入れ呼び奉じて余の園に帰る者有り |
| ④ | 客有 _下 呼 _レ 之入 _レ 匣奉 _レ 帰 _レ 余園 _一 者 _上 | 客に之を呼びて匣に入れ奉じて余の園に帰さんとする者有り |
| ⑤ | 客有 _レ 呼 _レ 之入 _レ 匣奉 _レ 帰 _レ 余園 _一 者 | 客に之を呼ぶこと有りて匣に入れ余の園の者に帰すを奉ず |

問3 傍線部B「苟近^レ我、我当^レ凶^レ之」の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

32。

- ① どうか私に近づいてきて、私がおまえの絵を描けるようにしてほしい。
- ② ようやく私に近づいてきたのだから、私はおまえの絵を描くべきだろう。
- ③ ようやく私に近づいてきたのだが、どうしておまえを絵に描けるだろうか。
- ④ もし私に近づいてくれたとしても、どうしておまえを絵に描けたらだろうか。
- ⑤ もしも私に近づいてくれたならば、必ずおまえを絵に描いてやろう。

問4

空欄

X

に入る漢字と【詩】に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

33

- ① 「座」が入り、起承転結で構成された七言絶句。
- ② 「舞」が入り、形式の制約が少ない七言古詩。
- ③ 「歌」が入り、がんれん頷聯とけいれん頸聯がそれぞれ対句になった七言律詩。
- ④ 「少」が入り、第一句の「多」字と対になる七言絶句。
- ⑤ 「香」が入り、第一句末と偶数句末に押韻する七言律詩。

問5 傍線部C「奈^レ春^レ何^レ」の読み方として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

34

- ① はるもいかん
- ② はるにいづれぞ
- ③ はるにいくばくぞ
- ④ はるをなんぞせん
- ⑤ はるをいかんせん

問6

【詩】と【序文】に描かれた一連の出来事のなかで、二重傍線部Ⅰ「太常仙蝶」・Ⅱ「仙蝶」が現れたり、とまったりした場所はどこか。それらのうちの三箇所を、現れたりとまったりした順に挙げたものとして、最も適当なものを次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 35。

- ① 春の城まも——袖——瓜爾佳氏の庭園
- ② 春の城まも——阮元の庭園の台——画家の家
- ③ 董思翁の家——扇——画家の家
- ④ 瓜爾佳氏の庭園——扇——袖
- ⑤ 扇——阮元の庭園の台——袖

【詩】と【序文】から読み取れる筆者の心情の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号

は
36。

- ① 毎年花が散り季節が過ぎゆくことにはかなさを感じ、董思翁の家や瓜爾佳氏の園に現れた美しい蝶ちようが扇や絵とともに他人のものとなったことをむなしく思っている。
- ② 扇から抜け出し庭園に現れた不思議な蝶の美しさに感動し、いずれは箱のなかにとらえて絵に描きたいと考えていたが、それもかなわぬ夢となってしまったことを残念に思っている。
- ③ 春の庭園の美しさを詩にできたことに満足するとともに、董思翁の夢を扇に描き、珍しい蝶の模様をあしらった服ができあがったことを喜んでいる。
- ④ 不思議な蝶のいる夢のように美しい庭園に住んでいたが、都を離れているあいだに人に奪われてしまい、厳しい現実と美しい夢のような世界との違いを嘆いている。
- ⑤ 時として庭園に現れる珍しい蝶は、捕まえようとしても捕まえない不思議な蝶であったが、その蝶が現れた庭園で過ごしたことを懐かしく思い出している。